

前は、寒天で型取りをしていたんですよ。もともと石膏装飾はヨーロッパから入ってきたもので、ゼラチンが使われていたのを日本では寒天を使ったということでしょうね。

### 西洋建築の石膏装飾の複雑な型取りをシリコンゴムで精度よく

型取り材料としてのシリコンのよさはなんですか。

植野 ひとつには生産性がありますね。寒天の場合は、型を抜けてもせいぜい3~4回ですが、シリコンなら強度がありますから、もっと抜けます。また、寒天は水を使いますから石膏にはあまりよくないんです。

佐々木 もちろん、最大のメリットは精度が高いこと、複雑な形も抜きやすく、緻密な型取りができるということです。

実際にシリコンが使われていて、もうちょっとこうだといいの、ということはありませんか。

石橋 空気中の水分と反応して固まるから、温度や湿度で硬化速度が変わってくる、それはわかるんですが、もうちょっと簡単に硬化スピードのコントロールができればいいなあ、と思いますね。

佐々木 材料が変われば、使い勝手も違いますし、作業環境もさまざまですから、自分たちが慣れるしかありませんね。そもそも作るものが一つずつ違うわけですから、工夫しながら作業していくうちに、いろんなコツやノウハウなどが身についてくるということでしょうね。

非常に気を使う大変なお仕事だと思うのですが、特に苦勞されるのはどんなことですか。

植野 新しいものを作ってしまったほうがラクなのに、と思うこともあります。文化財となるとオリジナルが大事ですからね。それで大前撮となるのが、なるべく創建時に戻すということです。ですから、オリジナルをイメージしてマスターモデルを作り、そのデザインでいいかを承認してもらうために何度もチェックを受けます。原型の承認を得るために数ヶ月かかることもあるんですよ。石膏でも、当時に近いものを使うように言われる。もっといい材料が出ていても、それを使うにはきちんとその理由をレポートにまとめて、説得しなければなりません。

佐々木 原型を作るにも、当時の形が残っているわけではありませんから、資料を見てその時代の建築の技術や流行を調べたり、その設計者が設計したほかの建物があれば見に行

たりします。それぞれ設計者には、その人ならではのポイントがありますからね。

植野 オリジナルがそのままの姿であるわけではありませんから、オリジナルはどうだったか、ということをかきと理論的に納得させるのが重要なんです。教科書がある仕事ではありませんし、1件1件まったく違うものですから、つねに真剣勝負ですね。

### 伝統の上に新しい技術や材料を融合させ次の100年へ歴史を伝える

非常に意義のあるお仕事で、特別な思いやこだわりなどもあると思うのですが。

植野 言ってみれば、祖父が手がけたような西洋建築が100年近く経って文化財になって、それを改修することに携われるというのは、ある意味ありがたい話で、歴史は脈々とつながっているんだということを実感しますね。

石橋 そういう貴重なものを残していくためにも、妥協はせずに、つねによりいい仕事を続けていくということに自分に課しています。

佐々木 自分が身につけてきた技術や知識やノウハウを信じてやっていくしかないですね。



シリコンゴム型(左)と、その型で複製した石膏装飾

修復現場の一例



たとえば絵葉書1枚でも、何かしら手がかりがあれば復元できると。そして、元あった姿に修復していく中にも植野石膏らしさは込めたいと思っています。変な話、あまりきれいに仕上げてもだめな場合があるんですよ。

植野 そこが難しいんですね(笑)。長い間、脈々と継承されてきた技術の上に、新しい技術や製法、素材などを融合させて、今の当社の存在価値があると思っています。ぜひ信越さんにも、さらに作業性に優れた材料を開発していただくと同時に、最新の情報なども提供していただければと思っています。

佐々木 われわれの仕事はシリコンなくては成り立ちませんから、ぜひこれからもよろしくお願いします。

植野 100年の歴史を次の100年につなげる、とても意義のある仕事だと思っています。これからも誇りと責任を持って、当社にしかできない役割を果たしていきたいと思っています。

ぜひこれからも御社ならではの技術を活かして貴重な文化財を残していただきたいと思います。今日は、興味深いお話をありがとうございました。

## ユーザー探訪 第95回

### 株式会社植野石膏模型製作所

創業は大正13年。植野石膏模型製作所という社名が示すとおり、スタートは石膏を用いた美術装飾や模型の製作だったという。現在では樹脂も使うが、基本にあるのはあくまでも石膏の技術。長年にわたり継承し、発展させながら培ってきた独自の技術をベースに大変意義のある仕事を行っている。それが、文化財建築の保存修復である。

# 歴史が息づく価値ある建築物を 次の時代へ引き継ぐために 石膏装飾の保存修復にシリコンが一役



装飾部 石橋 朋英氏

装飾部 主任 佐々木 宏通氏

代表取締役 植野 彰規氏

たとえば東京駅の赤レンガ、日本銀行本店、慶應義塾大学の旧図書館など、現代建築とは趣の異なる風格と優美さを持つ歴史のある建築物。明治時代から昭和初期にかけて建てられた数々の西洋建築には、単なる建物というだけでなく文化財として高い価値を持つものが多い。これら西洋建築の特徴のひとつとして、壁面や天井、柱などに施された石膏装飾があげられるだろう。優美な表情を漂わせる装飾も建てられてから長い年月が経てば、その美しい容貌が損なわれてくるものだ。重要文化財などにも指定されている歴史的な建築物を次の時代へ残すために補修や改修などが行われているが、その石膏装飾の補修にシリコンが重要な役割を果たしている。今回は、株式会社植野石膏模型製作所を訪ね、代表取締役の植野彰規氏、装飾部の佐々木宏通氏、石橋朋英氏に文化財建築の保存修復に関するこだわりや工夫、ご苦労など、興味深いお話を伺った。

### シリコン ここがポイント!

Point ① 再現性に優れ 精度の高い型取りが可能

Point ② 強度があり 複雑な形でも型取りが容易

Point ③ 材料に悪い影響を与えない

### 継承された技術をベースに 歴史的価値のある建物を保存修復

まず、簡単に会社のご紹介をお願いします。

植野 当社は、もともと彫刻家志望だった私の祖父が始めた会社で、最初は当時の洋館などの石膏装飾を行っていました。また、そういった建築物のミニチュアとして模型の製作なども手がけるようになりました。昭和30年代まではプラスチックの薄板はありませんでしたから、当時は模型といえば木か石膏だったのです。その後、戦争で新しい建物が建てられなくなりました。ただ、当社は映画のセットなどを作っていたため、石膏を使った仕事を続けることができたのです。それで全国から石膏の職人さんが集まってきて、うちで仕事を続けました。そのおかげで、石膏に関する技術が独自のものとして当社に蓄積され、今に至っているということです。

その技術を活かして文化財建築の保存修復を行っているということですが。

植野 明治になって西洋文化が入ってきて、明治時代から昭和初期にかけて数々の西洋建築が建てられました。それらのうちのいくつかが日本の文化財としても認められているわけですが、このままでは壊れてしまう、完全にだめになってからは補修できなくなる、その前に何とかもとの姿に戻して残していくということで、その一部に私どもが関わっているわけです。ご存知のように西洋建築には内装に石膏装飾が施されていますが、塗装を繰り返すうちに原型が崩れてきてしまうんです。そういった石膏装飾の型取りをして、復元するのが私どもの仕事です。

佐々木 建物に施された装飾部分を取り外して持ち出せる場合は、アトリエに持ち帰って型取りを行います。それが無理な場合は現場で

型取りをします。かっぱを着て、筆でなぞっていく、大変なお仕事ですよ。

その型取りにシリコンゴムをお使いいただいています。シリコンはいつごろから使われているのですか。

植野 はっきりは覚えていませんが、30年前にはすでに使っていましたね。メインではありませんでしたが、シリコンが使われるようになる

現場での作業風景

